

【問題提起】 第12分科会

「患者・施設利用者の給食改善～治療食・介護食の充実めざして」

◇運営委員 染原 剛（耳原老松診療／大阪医労連） 太田 敏雄（昭和大学付属烏山病院）
生井 利子（慶応大学病院） 服部 菜美（八王子医療生協城山病院）

◇助言者 吉田 義美（元東京女子医大付属病院）
畠山 久夫（元癌研究会有明病院）

病院給食は治療食であり、健康を維持する食生活の基本を伝える手段です。

介護・福祉施設における給食は、機能低下を防ぎ、生きる力の糧となります。給食部門としての主張を、内外にしっかりと伝えていきましょう！

そして、誰からも、どの部署からも必要とされる給食部門になりましょう！

これまでの継続した取り組みで、「まずい・冷たい・早い」と言われていた病院給食を改善してきました。そのことが診療報酬を改訂させ、病院給食を飛躍的に進歩させ、患者さんの療養生活を支えてきたことに他なりません。それに伴って、調理機器（技術）も進歩し、調理現場の様相は一変した部分もあります。提供する給食も、クックサーブをはじめ、クックフリーズからクックチルというように、給食そのものの形態も変化してきています。しかし、こういった目覚ましい進歩にもかかわらず、私たちの置かれている現状は年々厳しさを増しています。この間の、診療報酬の改悪は給食部門にとって影響が大きく、更なる改善を進めていく上で大きな障害となっています。そして今、病院給食の自己負担がさらに拡大されようとしています。このことは、患者負担の増大にとどまらず、治療食である病院給食を金の有る無しで崩壊させかねない状況に追い込むことは明らかな現実です。この目の前の課題とのたたかいと、新たな給食改善への挑戦が重要となります。給食の質を確保（担保）するのは、調理師・栄養士の努力と日々研鑽した技術です。また、介護施設や医療機関においても、高齢者の栄養確保や食べ難さ克服への新たな食事形態としての介護食や嚥下訓練食、チーム医療としてのNST等の取り組みの広がりには目を見張るものがあります。医療・介護・福祉スタッフとして、それぞれの技術を謙虚に認め高めあうことによって、より良い給食の提供ができます。私たちが提供している給食が、それぞれの施設によっての特徴となり、それぞれの施設の持ち味となって表現されています。そのような現場の経験を真摯に受け止め交流しあいましょう。そして、自分達の職場・組合・県医労連において実践し、形にしていくことが大切です。特殊な職場や恵まれた職場だけが医療研に参加し、存在しているわけではありません。何処にでもある困難だらけの職場からの工夫・実践の報告で、同じ苦労を分かち合える貴重な学習・交流の場です。地道に努力を積み重ねた結果が実を結んだこと、そして、仲間が、労働組合が大きく後押ししてくれたこと、そのことに確信を持った各スタッフの団結と励ましによって実を結んだ成果が医療研にあります。レポート報告を中心に分科会を運営します。是非、レポートを携えて、医療・福祉・介護の給食現場から一人でも多くの仲間の参加を呼びかけます。